パイレーツ・モダニティ
――海賊，奴隷，資本主義――

小笠原博毅

1. はじめに：海賊を引き寄せる

こんにちは，小笠原です。ご紹介いただきまして，ありがとうございます。まずお招きいただいた西先生，どうもありがとうございました。このような機会をいただけて光栄に思います。

僕は海賊史の専門家でもなければ，思想史の専門家でもなくて，本来ずっとこの10年，15年ぐらい研究しているのは，イギリスにおけるサッカーと人種差別についてです。サッカーや人種差別やマルチカルチャリズムを研究している人間がどうして海賊に興味を持ったかということからお話させていただきます。

海賊の話は，そうした一見関係のない研究のサブプロダクトなのです。それは一冊の本との出会いでした。後でスライドもお見せしますが，今，西さんの話にも出てきましたピーター・ラインバウとマーカス・レディカー，2人の社会史家が共著で書いた本，2000年に出ております『多頭のヒドラ（*The Many-Headed Hydra*）』[1)]という本です。大西洋世界の近代を考え直そうという，当然ポール・ギルロイの『ブラック・アトランティック」などとも共鳴する部分はあるんです。けれども，そもそも海賊への興味はもっと幼いころからもありました。皆さんどういうイメージで海賊を思っていらっしゃるのかわからないんですけど，僕なんかはアニメ，というか松本零士の漫画なんですね。『キャプテンハーロック』が僕にとっての最初の海賊です。本当はスティーヴンソンの『宝島』って言わないと文学史的には正当じゃないかもしれませんが，その辺なんですよ。要するにステレオタイプというか，ポピュラーカルチャーというか，漫画というか，普通に子供たちが話題にするような海賊のレベルからの話で始まります。

『宇宙海賊キャプテンハーロック』，ご存じの方いますか。いますね。ありがとうございます。3人，4人ほどいらっしゃいますけど，海賊というと架空のキャプテン・フック，実在はキャプテン・クックというのがおります。要するに海の荒くれ者で略奪しまくる，戦闘も辞さないと。一方で，縛られるのが嫌で自由を求めて海に出る，大海原に出るぞと。『パイレーツ・オブ・カリビアン』のジョニー・デップはそういうものを凝集したキャラクターをつくっているわけなんですね。そういう一見相反するような悪いやつら，一方では自由を求めて大海原に出る義賊であるし，他方で人殺しは平気でする。そういう相反する矛盾したイメージがあるような存在なんです。ハーロックが，宇宙を航行する海賊船，アルカディア号に新しく乗り込んできた少年に向かって，「ウェルカム・オン・ボード，よくぞいらした。ここは自由だ。お前の裁量だけで生きていけるんだ。やめたければいつだってやめてもいい。とにかく自由を謳歌してくれ」という。その少年はその気でいるんだけれども，古参の乗組員から，「キャプテンはああ言ったけれども，ここは鉄の檻だよ。規律でがんじがらめになっているんだよ。お前が船を下りると

きは，キャプテンに見捨てられたときか死ぬときかどっちかなんだ」という。そこにも相反する表象があるわけです。さあ自由だ，地球から飛び出るぞ，でも飛び出て生きていくためには鉄の掟を守らなければいけない。規律を守らなければいけない。そこでがんじがらめになっている存在が実は海賊なんですね。そういった海賊のイメージというのは，大体17世紀から18世紀初頭にかけてのカリブ海で活躍した海賊たちのイメージがベースになっています。これはもうスティーヴンソンの『宝島』のおかげです。

しかし，海賊と呼ばれる人たちは別にそこに限らず，それこそ古代ギリシャ・ローマの時代から古代中国の時代から，もちろん今のマラッカ海峡やソマリア沖にもいるわけなんです。しかし，どうも我々の頭の中にある海賊のイメージというのは，起源を一つに求めることはできないけれども，あの辺の時代のあの辺の海域に非常に限定されたというか，そこがプロトタイプになっているような気がします。

この本『多頭のヒドラ』も大西洋が舞台になります。と同時に，きょうお配りしたレジュメでは大体4つぐらいに話を分けてあるんですが，2ページ目の下のほうに，第2幕，2章として「パイレーツ・ユートピア」というコーナーがあるので見て下さい。ここでお話しするのは，地中海からアフリカ沿岸，マダガスカル，インド洋西岸にかけての海賊たちの話なんです。これらは非常に恣意的な選択です。もちろんバイキングだって海賊だという人もいるわけですし，もちろん倭寇もそうですね。恣意的な話になってしまうのには理由があります，海賊の歴史学が非常に難しいのは，裁判記録の文書ぐらいしか，実証的に文書，文字として彼らの存在，彼女たちの存在を証明するものがないということです。判決文とか公判，裁判所で首くくりになるまでのいろいろな証言とかの歴史ぐらいしかないんですね。なので，海賊の歴史は文献史学だけでは不可能な領域で，なおかつ空想と妄想と実証的なものがないまぜになっている，まさに神出鬼没な対象を相手にしなければならないわけです。そういった存在を，今日のこの「越境する民－接触／排除」というテーマにどういうふうに結びつければいいかなと，西さんにお話を伺ったときに考えたんです。僕が20世紀後半のイギリスの人種差別の研究を主なベースにしていますので，どうしても人種やエスニシティ，ナショナリティによって包摂や排除がある，もしくは一時的な包摂がある，その逆のベクトルも当然あるという話に持っていくしかないかなと考えました。肌の色が違ったって同じサッカーチームだったら友達になれるし，たとえ肌の色が違ったって，昨日までバナナを投げられていた選手[2)]がすばらしいプレーをすることによって我々の仲間だという承認を得ることもある。そういう人種や民族や，移民なのかどうか，どういう言語を話すのか，宗教は何か，生活慣習はどうなのかという社会的なアフィリエーションによって区切られる線というのは，まだ強烈だし，強力だし，非常に激烈な差別構造を内に含んでいるんだけれども，それだけでは説明できない，それだけでは因子として不十分なまた別の接触，排除，包摂，一時的包摂，一時的排除みたいな力学があるよという話をしたいと思います。

2. 海賊と奴隷，海賊船と奴隷船

お断りしておくと，レジュメ，この順番どおりにいきません。すみません。僕の普段の講義

と一緒であっち飛んだりこっち飛んだりします。まず，この旗を見ていただきたいんです（図1）。これはジョリーロジャーという，『ワンピース』好きな人はわかりますよね。『ワンピース』はそこに麦わら帽子が乗っているわけです。これは別に20世紀の「伝統の捏造」ではありません。これはもう16世紀，17世紀，例えばバーソロミュー・ロバーツであるとか，エドワード・ティーチであるとか，実在した，そして判決によって首をくくられたり，取り締まられて撃ち殺されたりした連中が実際掲げていた旗をきれいにしたのがこんな感じです。では当時実際どのような形象があったかと言えば，例えば，これわかりますかね（図2）。あまりきれいではないですが，アイルランド西部のスライゴーというところにある教会のレリーフの一つで，その教会は海賊が埋められている墓があると言われています。スカルとクロスボーンがばらばらになっている。要するにモチーフが実際にあるわけなんですね。例えばこんな人がいました。キャプテン・キッ

図1

図2

図3

ドです（図3)。本当に。何百年も前の人間をなぜ今僕が彼らはいたんですというふうに言えるかというと，レジュメの年表の1724年というところを見ていただきたいんですが，キャプテン・チャールズ・ジョンソンという人が『最も悪名高き海賊たちの略奪と殺人の一般史』（以下『イギリス海賊史』）[3]という本をロンドンで出版しています。彼は自分もかつて船乗りであり，さまざまな船の上や寄港地やロンドンの港の酒場などでさまざまな海賊たちの話を聞き，実際何人かにインタビューをした聞き取りを本にまとめましたという体裁でこれを書いたんですね。そこに出ている海賊たちの名前を，ロンドンにあったニューゲート監獄の収監記録や，裁判，死刑執行などの記録に照らし合わせていくと，本当にいた。そのうちの一人がこのキャプテン・キッドです。名前はなんとなく知っているのではないでしょうか。ロンドンに行くとキャプテン・キッドというパブがあるわけです。テムズ川の南岸のロザーハイズという町に，僕はちょっと住んでいたことあるんですが，テムズを挟んだ対岸にこのパブがあります（図4)。伝説によれば，このパブでキャプテン・キッドの手下たちが作戦を練っていたと言われている。実際，中には判決文の写しとか手形とか使っていた鎖鎌とか，そういうのが飾られて，本当かどうか知らないですよ，本当に。パブですから。ただそういうアミューズメント空間を提供しているという一つの実情があります。

この画像はそのパブの少し西，Eって書いてあるこれ同じテムズの南岸なんですが，これEってエクセキューションのEなんです（図5)。ここはもう18世紀の終わりぐらいから倉庫になっていますが，元エクセキューション・ドックというところで，絞首刑の判決を受けた海賊たちがこのあたりの広場で首くくりに遭っていた場所です。ご存じの方もいると思います。海賊の死体というのは見せしめのために1カ月間つるされるんですね，そのまま。カラスにつつかれたり，腐って落ちていくと野良犬が食べたりという，そういう姿を見て，ああ，海賊なんかになるのやめようという見せしめをしようというふうにしていたんですけど，このエクセキューション・ドックという地名がまだ残っています。

さあ，一口に海賊といっても，ここからがちょっとややこしいんですけど，僕ら海賊，パイレーツ，割と一般名詞で使うんですけれど，18世紀ぐらいまでは，パイレーツという言い方よりも，例えばプライヴァティーアとか，コルセールとか，もうちょっと細分化された言い方がされていた。プライヴァティーア，つまり私掠船というとピンと来る人いると思います。キャプテン・

図4

図5

ドレイクという人がエリザベス一世の時代にいた。彼は海賊なんだけど，同時に女王から免状をもらってスペイン船やポルトガル船を拿捕する権利を得ていた。要するに海軍でもあった。海軍，海賊，ときには貿易もしていた。当然奴隷も積んでいたでしょう。そういう，今では犯罪者として法の外に置かれている存在が，特にキャプテン・ドレイクは17世紀の初めですけれども，まだ国民国家というものがよちよち歩きをするかしないかくらいのやっと細胞分裂始めるぐらいのころというのは，いろいろな役割を担っていたんです。その後ドレイクのような人たちの役割はどんどん削られていって，法の外に置かれ，犯罪者にされていく。それをしたのは国民国家のシステムであり，植民地主義のシステムであり，というふうに言えるわけなんです。次のこのヘンリー・モーガンという人，ラム酒が好きな人は名前でピンと来ると思います（図6）。ジャマイカのラムの銘柄になっている人で，ジャマイカのポート・ロワイヤルという港を管理するお城の総督だった人です。しかし同時に海賊でもあった人です。彼は2回ぐらい牢獄につながれています。しかし，つながれている間にスペインとイギリスとの関係が悪化して，どうしてもスペイン船団をやっつけなきゃいけないというときに恩赦されるんですね。恩赦されて最後にはポート・ロワイヤルの総督にまでなるという人，だからもうわけわからないんですよ。海賊だ，取り締まれ！という時代に至るまでに結構長い時間があって，利用されたり，利用したりという，そういう複雑な関係性が見てとれるのです。

これはエドワート・ティーチという海賊です（図7）。彼も実在していました。別名「黒ひげ」。「黒ひげ危機一髪」ゲーム[4]の黒ひげのモデルになった実在の海賊です。彼は相当悪いやつなんだけど，1718年に捕まって絞首刑になっています。ただ，彼は我々が抱く海賊の一つの典型的イメージですね。黒ひげでこういうハットをかぶって残虐でという，そういう海賊の一人ですね。

最後に紹介するのはバーソロミュー・ロバーツ。「ザ・ブラック・バート」と呼ばれた大海賊でして，彼は最後の大海賊，海賊黄金時代を彩った最後の人間だと言われていて，1722年にイ

図6

図7

図8

ギリス船との海軍との戦いでのどを撃ち抜かれて死にました（図8）。海賊と奴隷の関係を考えるとき，彼の生涯というのは非常におもしろい。ただその生涯は，先ほど言ったチャールズ・ジョンソンという人が書いたとされている海賊の歴史にしか克明には書かれていない。お気づきの方もいると思います。このチャールズ・ジョンソン，例えばこれはダニエル・デフォーなんじゃないのということがまことしやかに言われ続けています。密やかな論争にもなっています。フィフティー・フィフティーぐらいのようです。本当にダニエル・デフォーだったのか，本当にチャールズ・ジョンソンという人が書いたのか。この『多頭のヒドラ』が出た2000年の段階ではほぼチャールズ・ジョンソンだということに疑いを抱く人はいなかったと記憶しているんですけど，最近ロンドンのグリニッジにある海洋博物館の説明によると，どうも本当にチャールズ・ジョンソンだったんじゃないか，もしくは違う名前の，海賊を取り締まる側の海軍将校だったんじゃないかという説があるようです。ただ僕は歴史家ではありませんので，いい史料さえ提供していただければ誰でも構わないです，正直。

ところでこのロバーツは，若いころ奴隷船の船員をやっていました。今のアイボリー・コーストあたりから喜望峰を抜けてマダガスカルのあたりまで結構旅をして奴隷を運んでいたようです。バルバドスに奴隷を運ぶ途中に別の海賊船に襲われて，「お前どうする，ここで死ぬ，それとも俺らの手下になる？」と言われ，敵の海賊の手下になります。その後どんどんランクを上げていって，「クイーン・アンズ・リベンジ」，「アン女王の復讐」という船を持つようになるんですけど，主なターゲットはスペイン船，それも奴隷を積んでいるスペイン船でした。そしてこの先が重要なんです。彼は奴隷船を襲った後に，奴隷船の船長や上級の将校を捕まえてむち打ちをするんですね。そのときに，これは「ディストリビューション・オブ・ジャスティスだ」という言い方をしたといいます。「正義の分配だ」と。どういうことでしょうか。「奴隷を積んでいるお前らは悪いやつだ，俺はお前らに，正義の分配としてむち打ちをくれてやる」と。じゃあ彼は奴隷を全部解放したかって，そんなことはないわけです。またさらに高値で売り飛ばしたりもするし，こいつは使えねえと思ったら平気で残虐に殺す。しかし一方で，能力のある者

を見つけると自分の船のクルーにもすると。つまりこういうことです。彼はウェールズ出身なんで，白人で，実は小っちゃいころ割と敬けんなクリスチャンだったらしいんですけど，海賊なのか奴隷なのか，白人なのかアフリカ系なのか，力を持っているのか，持っていないのかという非対称な力関係といいますか，そういうものが俄然としてあると。決してそれは否定できない。けれども他方では，その非対称な関係性を持ったAとBが出会ったときに，もともとあった非対称な関係がそのまま出会いの状況に反映されるかというと，そんなことはないということを一つ言っておきたいと思います。どういうことかというと，別に彼はヒューマニストでもなければ奴隷制が悪いとも思っていないし，要するに敵がいっぱい奴隷を積んでいるから「ディストリビューション・オブ・ジャスティス」だと言っているだけ。でもここで彼はジャスティスという言葉を使っていることが一つ重要なのです。別に法律用語じゃないですよ。彼自身がジャスティスって言っているだけですからね。

さらに重要なのは，彼が活躍していた100年後ぐらいに出てくるアボリショニスト，奴隷制廃止論者たち，正確には1780年ぐらいから活動を始めますが，奴隷制を廃止していこうという人たちと別に意見を同じくしていたわけではないということ。奴隷は奴隷，物ですよね。商品ですから，略奪品ですから。けれど彼によって解放された奴隷はいるし，彼によって船乗りとしての技術を与えられた奴隷はいるしという，一言でまとめるとむちゃむちゃ複雑な関係性があったということなんです。でもとても大事なことで後から効いてくるんです。ロバーツによってスペイン船から解放された奴隷でも，例えばすごい目のいいやつとか，すごいロープを結うのがうまいやつとか，身が軽くてマストにするするっと誰よりも早く上れるやつというのは，お前使えるから残れと言われるわけですよ。そういう技術がなかったり，ただおびえていたりという人間はどんどん刺されて殺されて海に捨てられるわけですよ。これは命のやりとりではあるんですけど，言い方をかえたら技術の問題でもあるんですね，技術。この中で船に乗られる方，ヨットとかやられる方いらっしゃいませんか。いないですか。じゃ，宝ヶ池でローイングボートぐらいは皆さん漕いだことあるでしょうかね。船を漕ぐってすごく難しいんですよ。宝ヶ池ぐらいじゃいいですけど，風が吹いている海の上で一人でローイングボートに乗っていてごらんなさい，もうこの孤独感といったらないから。でもその孤独感を克服するためには，体と感覚と頭を使って，波や風を読んで，どうしたら安全に岸までたどり着けるか，どうしたら安全に所定の時間内に目的地に行けるかという目標を達成する技術を身につけないといけない。奴隷船，いわゆる18世紀のガリオン船というのは大体200トンぐらいです。そこに350から400人ぐらいの奴隷を詰め込みます。最低限でもクルーは35人必要だったそうです。これはもう一つの僕のネタ本であるマーカス・レディカーの，最近上野直子さんが訳された『奴隷船（ザ・スレイブ・シップ）』[5]に書いてあります。どんな目的の航海だろうが，船のクルーにはいろいろな役割があります。コックとかも含めて，いろいろな役割があります。その役割を誰一人としてさぼることはできないんです。さぼって失敗するということは即死につながるからです。航海するだけではない，戦闘もありますよね。腹減ったら飯もつくらなきゃいけない。食い物がなくなったらカモメをとらなきゃいけない，ウミガメをとらなきゃいけない。なぜか海洋史の七不思議，あとの6つは知りませんけど，海賊も含めて当時の船員って魚食わないんですよね。ベーコンとかソルトビーフとかむっちゃ積み込むんですよ。あと生きたガチョウとか積み込む。

釣りして魚とか食えばいいと思うんだけど，こいつら魚食わない。食う海の生物はウミガメ，ウミガメをよく食べます，精がつくから。それからカモメ，鳥ですよね。カモメを捕まえて食べるんです。それはともかく，それも技術なんですけど，そういう技術を持った人間たちが非常に厳密で厳格な規律と階級制度のもとで一隻の船を操る。これだけいうと，奴隷船も海軍の軍艦も貿易船も商船も変わらないんですよね。何を積んでいるか，目的は何かということだけで，共通する技術は一切変わらないんです。だからドレイクやヘンリー・モーガンのような知力とリーダーシップと技術を蓄えた人間たちは，あっちにも行ける，こっちにも行ける，そういうある種流動的な力関係の中を泳げるような立場性というのを担保できたんです，まだこの時期は。

さて，この本です。これが『多頭のヒドラ』(図9)。お読みになった方もいると思います。きょうの僕の話はもうほとんどこれを一冊読んでくれれば，どこかで聞いたことがあるよということになってしまいかねないんです。しかし，これ2000年の出版でして，僕はもう17年間毎年のように読み続けていて，海賊の話も何回かさせていただいているんですけど，最近ちょっと見解が変わった部分がありました。レディカーとラインバウが言っている基本的なテーゼは，18世紀前半までの大西洋を行き来する船の船員たちは，それがどんな立場であろうとある種のプロレタリアの原形であったということです。つまり工場というものが陸にできる前に，特定の役割と時間を割いて一つの船を操らなければいけない労働に従事し，時間と労働力を提供しないと生きては行かれないということです。言ってみれば，船が工場のメタファーになっているんですよね。陸にでき上がっていく近代の生産諸関係に基づくような社会構成というものの原型が，既にそれ以前の海の上ででき上がっていたというのが彼らの大きな仮説なんですね。その仮説を裏づける資料の一つとしてこの『イギリス海賊史』がある。

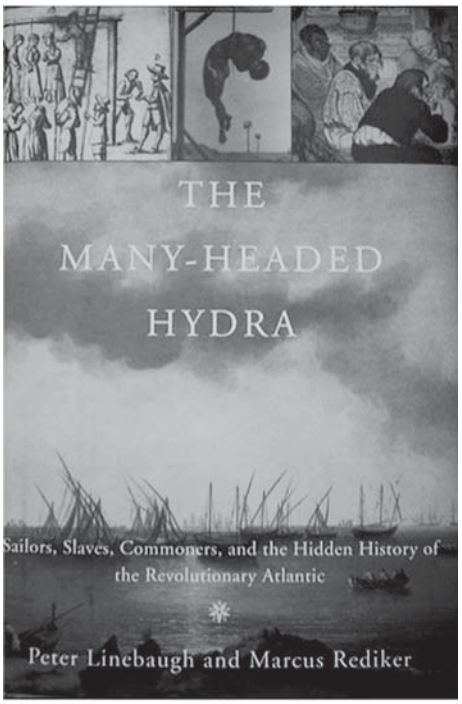

図9

なるほどと。海にはもう18世紀の初めに，自分の体と時間以外提供できるものがない，プロレタリアの原形がいました。しかし，何回も言っているように，すごい技術が必要なんですね，海の上で生き抜くためには。もちろん，非熟練労働者としてのプロレタリアートというものであっても工場で最低限の技術は要るわけです。非熟練なんていう状態では死にに行くようなものなんですね，海の上に。スキルがないといけないんです。じゃ，スキルドレイバー，熟練労働者としてのプロレタリアートでいいんじゃないかという言い方ももちろんできると思うんです。ただそこで話にオチをつけてしまうと，もっと複雑でもっと豊かな船の上の人間関係や「社会」の出現の仕方というものを見逃してしまうん

じゃないかなというふうに僕は考えるようになりました。別に陸上の近代を形づくった生産条件にしろ生産関係にしろ，それが一切陸から始まったというつもりはないですよ。彼らの主張に乗るように，船の上で，もしくは水際で，海の上でそういうものの原形ができ上がったという言い方はできるわけですし，当然分業というのは陸よりも海の上や沿岸部で先に始まっているわけですから。造船所や沖仲仕の世界で始まっているわけですから。さらに，定額賃金制です。いろいろな説があると思います。歴史の専門の方がいたら教えていただきたいんですけど，ピーター・ラインバウの『首縊りのロンドン』[6]によると，初めて定額賃金制を導入したのは，ジェレミー・ベンサムの弟のサミュエル・ベンサムが所長をしていた南ロンドンの造船所でだというのです。少なくともワン・オブ・ゼムであることは確かでしょう。同じぐらいの時期，17世紀の終わりぐらいに，ドックヤードや倉庫街や何か特定の時間で特定の成果を上げなければいけないシステムの中で定額賃金制が発生したのは確かなんでしょうけれども，こと船や海に関する歴史を紐解いていくと，どうも陸上よりも水に近いところで近代の労賃システムができ上がったんじゃないかというのは多分当たっているような気はするんですね。

既に話は近代ってどういう時代なのというところに入っちゃっているんですが，あちこち飛んですみません。これレジュメすみません，僕全部読みません。参考資料としてぜひお手元に置いて，ああ，この辺の話かなと思っていただければいいんです。最初のほうの年表を見ていただくと，世界史をやってきた方々は割と馴染み深い事象がいっぱい並んでいると思うんですけれども，1635年から1833年まで，200年間ぐらいの年表がそこに書いてあります。環大西洋世界の出来事がいっぱい書いてあるわけなんですけれども，複数の近代という考え方が当然あるわけです。大西洋世界にどうしても目がいきがちだけれども，そうじゃないところでも近代的なものというのは芽生えていたよ，そして独自の発展を遂げていったんだよという考え方は恐らく正しいのだと思います。ただ，大西洋世界が非常におもしろいのは，我々が中学，高校時代から教わってきた市民革命の話とか啓蒙の話とか，理性の話とかヨーロッパ文明の話とかというものがどうも嘘くさい，つまり大西洋の海の歴史は，どうも教わってきた話とは違うんじゃないかと思えるようになるのです。さっきの工場の話もそうですよね。工場の原形は奴隷船にあったとか海賊船にあったと言われても，じゃ証拠持ってこい，裏づけろと言われるとなかなか文献史学的には難しいと思います。でも考え方としてそういう，反証ではないですけど，我々が是としてきたような市民革命の時代以降のヨーロッパ的なものの発展の歴史みたいなものを少し疑ってかかるようなことはできるんじゃないかなというふうに思っています。そのときの主人公が海賊なわけですね。

レジュメの右側，2ページにいっていただくと，例えばクリストファー・ヒルという人の引用があります。これはもうイギリスのラディカル・ヒストリアンの大ボスですね。彼に言わせると，大西洋の海賊たちというのは清教徒革命から名誉革命にかけて駆逐されていったラディカル過ぎるやつらのなれの果てだということになります。クロムウェルの恐怖政治があり，名誉革命による制度改革があり，本当はこうしたかったんだけど，イングランドは自分たちが思ったような国にはならなかった。じゃどこに行くか。これはなかなか難しいところです。植民地に行くわけです。アイルランドじゃなくてカリブに行くわけですよね。でもそこでもうまいこと定住できなかったやつらが海賊になったんだと。そのうちの一つが例えばレヴェラーズです。パ

トニー討論で奴隷制廃止を訴えたレヴェラーズ，水平派と呼ばれる人たちだったり，ディガーズとか真正水平派と呼ばれた人たちが土地の共有性を説いて，穴掘って，別に洞窟掘って住んでいたわけじゃないんですけどね，ちょっと自分たちで土地を耕していたというだけなんですけど，彼らや，クエーカーの非常にラディカルな人たちであったりとか，最近マーカス・レディカーはベンジャミン・リーというクエーカーのラディカルなアボリショニストの伝記を出しましたけど，そういう人たちがイングランドを離れて海に出ていって海賊になったんだという説をクリストファー・ヒルは採っています。レディカーも基本的にそのラインで海賊たちのジェネオロジーを考えているところが結構あります。しかし1722年，バーソロミュー・ロバーツの戦死を機に，大規模で海軍も恐れおののくような海賊たちの活躍というのが目に見えて減っていきます。それは2ページ目の下から2番目のちょっと長い引用，レディカーの本からの引用があります。海賊掃討のプロセスというのは同時に国民国家というか，国民経済のシステムが整っていくことです。しかし，その西ヨーロッパの国民経済のシステムというのは，その資本の原始的蓄積は植民地からの収奪によって立っていて，植民地と宗主国との間の安全な通商，通路，資本の流れを妨げるものとしての海賊というのはもう使い捨てにしていくということでもあったわけです。おもしろいことに，海賊が消えていったり絞首刑になったりしていった1720年代後半から1730年代，40年代にかけて，皆さんもご存じの奴隷の反乱がたくさん起こるんですよ。一番有名なのはジャマイカの第一次バルブ戦争，1731年から5年ぐらい続くやつですね。これレディカーもラインバウも言っていないんですけど，どうも僕には偶然とは思えないんですね。海賊がシュンとなっていったのと時をほぼ同じくして奴隷の反乱が起きている。これは完全に妄想ですけど，では海賊がいた時代というのは奴隷たちが反乱を起こさなかったかというと，そんなことはありません。小規模ながらたくさんの反乱はありました。でも，その規模の変化は明らかです。もしかしたら，海賊の社会が不満を持った奴隷たちの，何らかの受け皿になっていたのではないかと思うのです。大体奴隷の反乱って別に勝算があってやるわけじゃないですよね。だから勝算がないけど蜂起せざるを得ない状況にまで至らしめないような社会の何らかの受け皿みたいなものを海賊が用意していたのではないかという仮説は立つと思っています。自分でそれを検証しろと言われると困るんですけど，余り検証する気はないです。ただ，そう考えたほうがこの年表を読みやすいかな。そのほうがおもしろいかなというふうに思います。

3.「パイレーツ・ユートピア」

一方，そういう海賊の動きをもっとラディカルに，僕なんかよりさらに妄想をふくらませて我々に提供してくれているのがハキム・ベイ，本名ピーター・ランボーン・ウィルソンが書いた『海賊ユートピア』[7]という本ですね。ピーター・ランボーン・ウィルソンはアナキスト思想家です。彼の思想の根源には海賊的なものがあると本人が言っています。このレジュメの第2節に当たるところなんですけど，ピーター・ランボーン・ウィルソンもレディカーも書いているんですが，ミソンという元フランス海軍の提督だった人間が，もう嫌になって，自分が取り締まる側だった連中に組みして，マダガスカルの北部あたりにリバタリアという海賊の共和国

をつくったというのです。決して実証的な証拠はないです。いろいろな痕跡はあります。兆候として読める証拠はあるけれども，はいこれですよと出せる実証的な証拠はないんですけど，そこででき上がったリバタリアという共和国は，まさにある種の社会主義の理念を実現していて，共有財産制であったり，私有財産は認めているけれども，きちんと供出しなきゃいけないものがあったり，議会があって，誰しも平等に選挙権を与えられていたりとか，言語が複数話されていたりとか，社会保障制度が整っていたりとか，そういう非常に現代的な語彙で説明できる社会環境が整っていたというのです。

この話って，どうしてもある種ロマンティックな感情が消せない人，僕もそうだと思うんですけど，そこで止まってしまうんですね。リバタリアってあったんだよ，きっとと。あっていいじゃないかと。世界は世知辛かったんだから，そういうやつらがその辺にいたっていいじゃないかと思ってそこで思考を止めてしまうんですけど，せっかくこういう機会なんで，もう少しこう自分の感情を疑ってかかっていくと，リバタリアという，架空か史実かわからないけど，その場所で実現されていた，例えば病気やけがをした人に対する社会保障的な援助というものの起源をたどってみることもできます。この社会保障制度，実は既に海賊船の中で実現されていた。これはチャールズ・ジョンソンの記述にもあります。戦闘によってけがをした者は2カ月間陸で休んでいい。その分賃金や治療費はキャプテンから支払われるとか。それまでマストに上って見張りをしていたやつが，敵に片目をくり抜かれたと。もう今までの視力は維持できない，耐えられない，じゃ何をするか。そいつは実はロープを結うのがうまかった。だったら違う技術を提供してくれたら首にしないよ，また船に乗っていいよとか，そういうオルタナティブが技術に基づいているといえばそうなんですけど，オルタナティブな生き方というものが常に提供されていたという状況は，もう海賊船の中にありました。バーソロミュー・ロバーツもそうですし，エドワード・ティーチもそうですし，掟をいっぱい書き残していますが，そういうことがきちんと明文化されています。というのも，チャールズ・ジョンソンの本にしか書いていないんですけどね。ただ，余りそれを疑ってかかったり，証拠がないからそんなのはただの妄想だというのも，嘘かなという気が少ししております。

よろしいでしょうか。あと15分ぐらいで終わります。これまでの話大丈夫でしょうか。付いて来ていただいていますでしょうか。いいですかね。質問あったら後で言ってくださいね。お願いします。

4. 消されてきた女海賊

次のところに移ります。今までの話というのは，「現代思想」のもう随分昔になります，2011年7月号の「海賊，洋上のユートピア」という特集があったんですが，そこで僕が書かせてもらった，掲載された論文やレディカーとラインバウの抄訳の中に大体書いてあることです。ところが，今まで無条件に話してきた海賊というのは男性ばかりの話でした。男性だけの話でも，一方で海賊とホモセクシュアリティというのは切っても切れない関係があって，『ソドミーと海賊の伝統』[8]という本があるぐらいなんで，それなりに人口に膾炙した事実ではあったようです。

他方で，女海賊の話をしようと思います。要するに海賊社会では，階級的なもの，海賊と奴隷，

もしくは階級分化された後の原始プロレタリアというかですね，プロレタリアと資本家，もしくは売られるものと売るもの，そういう者たちの接触と排除の関係があると同時に，ジェンダーによる接触と排除という点からも海賊という世界を交差しているいろいろな事例が考えられます。これも海賊の歴史に詳しい人は知っていると思います。アン・ボニーとメアリー・リードという，2人の18世紀初頭の海賊がいます。女海賊です。これメアリー・リードですね（図10）。これアン・ボニーですね（図11）。2人とも男と偽って船に乗っていた。それは女を乗船させてはいけないという掟があったからです。じゃ，何でそんな掟があったかといったら，掟をつくらないと，むやみやたらに女を乗船させるからですよね。だから掟をつくらないとやっていられないわけです。それをうまく利用して彼女たちは海賊になりました。メアリー・リードはロンドンの生まれです。アン・ボニーはアイルランドの生まれです。メアリー・リードは，最初ジャック・ラカム，別名「キャリコ」ジャックという，キャリコって木綿の白いシャツのことですけど，すごいおしゃれな海賊のキャプテンがいて，彼が好きで，彼の船に乗っていたんです。恋人同士だったんです。しかしあるとき，男性の格好をしたアン・ボニーが乗ってきて，そっちに目移りして誘惑しようとしたと，船の底で。そしたらボニーが女だとばれてしまった。さあ，どうしよう。でも「キャリコ」ジャックは寛容なキャプテンだったので彼女たちに乗船を許す。これは全部チャールズ・ジョンソンの説明ですよ。義を感じた彼女たちは男よりも勇敢に戦闘に立ち向かい，男よりも率先して獲物を確保する，拿捕することに精進したと。で認められたという話があります。そういう話をすると，例外でしょうって。やっぱり男世界だし，それはそうですよね。18世紀初頭ですから。しかしそんなことはどうもなかったらしく，たくさんの女性の海賊はいた，大規模であれ小規模であれ。問題は，本当にいたとしたら，そんな

図10

図11

にいたはずなのに，なぜ今に残っている話や逸話というのは男ばっかりなんだろうなという，記憶の継承の部分を考えたほうがより生産的だとは思います。アン・ボニーは意外と長生きしているんですよね。85 歳まで生きて。メアリー・リードはすぐ死んじゃって。2 人とも実は「キャリコ」ジャックが海軍に捕まったときに一緒に捕まっているんですけど，2 人とも妊娠していたんですよ。当時のイギリスの刑法で，妊娠している女性は首縊りにしちゃいけない，子供も死んじゃうからという決まりがあって，2 人とも刑を免れたら，獄にいるうちにメアリー・リードは死んでしまう。アン・ボニーは子供を産んで獄を出た後にオランダに逃げて別の人と結婚して割と幸せな一生を送った感じですよね。長生きですよね，当時 85 歳というのは。

この 2 人の突出した海賊の具現化する女性的なもの，ジェンダー化されたものが海賊にどういうモチーフを与えているのか。後に我々が海賊というふうに認識するものにどういうモチーフを与えているのかというのをちょっと考えてみたいんです。これドラクロワの有名な「自由の女神」ですよね（図 12）。フランス革命の象徴的な絵。この構図をちょっとよく覚えておいてくださいね。リバティという女神様がいて，周りに兵士がいて，打ち倒した敵がここにいて，この構図。これドラクロワはいつ書いたのか。1830 年です。19 世紀の前半の革命の時代の真っ只中ですね。この構図を覚えておいて，こういう絵を見ると，似ていませんかという話です（図 13）。レディカーとラインバウも，この 2 つの絵は似ていますよねと書いています。しかし，そこで話終わっちゃっているんですけど，僕は似ているどころの話じゃなくて，まさにこれなんじゃないかと。こっちの絵なんじゃないかと思うわけです，本当に重要なのは。これは先ほども紹介したチャールズ・ジョンソンの『イギリス海賊史』のオランダ語版の表紙絵なんです。英語版の原著は 1724 年に出ています。何と翌年 1725 年にもうオランダ語に翻訳されています。この絵，ちゃんとジョリーロジャーの旗もあるし，女性が主人公で，構図がさっきの 100 年後に書かれるドラクロワの絵となぜ同じなのか。でも，こういう言い方，発想が逆なんですよね。多分ドラクロワはこれを見て真似したんじゃないかって考えたほうが時系列にかなっている考

Figure 10. Eugène Delacroix, *Liberty Leading the People* (1830); the Louvre, Paris.

図 12

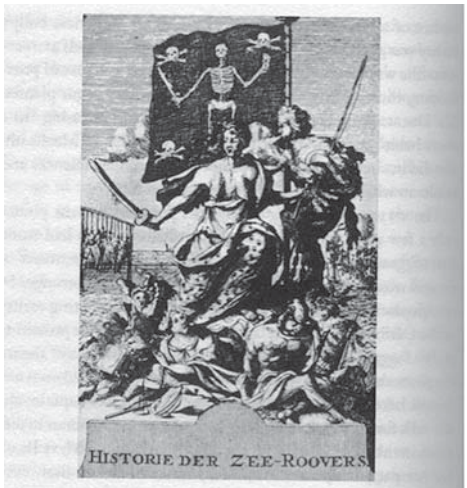

Figure 9. An allegory of piracy (1725); Captain Charles Johnson, *Historie der Engelsche Zee-Roovers* (Amsterdam, 1725).

図 13

え方だと思うんです。この絵のモチーフ，なぜこれは女神じゃなきゃいけなかったのか。当然海の神様は女ですから，だからナポリとか行くとマリア信仰が濃いですよね。船乗りが多い町って地中海もそうですけど，インド洋あたりもそうなんですけど，女神様系が多いんですよ。そのあたりからモチーフを得ているんじゃないか。つまり海の上での主人公というのは，今まで無条件に男性の名前ばかりをしゃべってきたけれども，もしかしたら本当はジェンダーという観点からしたら，女性であり女性的なものというのが何か原理原則めいたものを司どっていたのではないかという仮説も立てられるのではないでしょうか。また太古の昔とか，神話時代というと話がうさん臭くなるんだけど，つい最近ですからね，これね。つい最近の話なんで，そんな昔の話じゃない。じゃ一体その時代からこの200年，300年の間に何が大きく変わったのかということが大きな問題として出てくると思うんですけど，ボニー，リード，そしてこの表紙絵はそのあたりを考えるいい材料だと思います。

5.「薪を切り水を汲むもの」,「モトリー・クルー」あるいは「マルチチュード」の反乱

そろそろまとめに入ります。レジュメの3ページの3番，まとめというか，今までの話を少し理屈っぽく書くとこうなるということです。『多頭のヒドラ』の中に ‘hewers of wood, drawers of water’ という言い方が出てきます。「薪を切り水を汲むもの」です。それから「モトリー・クルー」という言い方が出てきます。これはヘビメタバンドの名前じゃないですよ。ヘビメタバンドはここから名前をとったと思うんですけど。それから「マルチチュード」という言葉が出てきます。ちょうど僕がこの海賊の話をし出した2011年ぐらい，まだネグリ＆ハートという言葉が割とホットだったので，おお，「マルチチュードか！」みたいになったんですけど，今この言葉使うとちょっと薄ら寒いじゃないですか，何となく。薄ら寒いと僕は思うんですよ。けれど年表の1789年を見て下さい。フランス革命のところに，「オラウダ･エキアーノ自伝を出版」と書いてあります。このオラウダ・エキアーノ（イクイアーノ），元奴隷で自分の自由を買い戻して，ロンドンで市民として生活をして自伝を書いた人なんですけど，彼の自伝の中に「マルチチュード」という言葉が出てくるんですよ。「マルチチュード・イズ・ア・ストレングス」という言い方をしている。誰のことを指しているのか，何を指しているのか，つまり自分も含めたごちゃ混ぜの人間たちこそが力なんだ，強さなんだということをはっきり彼は書いています。だから，別に文句を言うわけじゃないですけど，ネグリ＆ハート色から少しこう，「マルチチュード」という言葉を引き離して考えると，もう少し広い視野で歴史を俯瞰する視点ができるのかなという一つの事例です。このマルチチュードという言葉，また最後の最後で効いてくるんでちょっと覚えておいてください。

すみません，もう一回「薪を切り水を汲むもの」,「モトリー・クルー」,「マルチチュード」の反乱というところを見て下さい。海賊が衰退していって，それの反動として奴隷反乱がカリブのさまざまな地域で起こって，1740年代，50年代になってくると，ヨーロッパでは啓蒙の時代がやって来ます。ぼちぼち奴隷反対論者が出てきます。フランス革命やアメリカ独立革命の気運が高まっていきます。我々がなれ親しんでいるヨーロッパの市民革命もしくは市民の誕生

という時代を迎えるわけなんですけど，それは同時に植民地大繁盛の時代なわけですよね。そしてそれは奴隷制大繁盛の時代でもあるわけです。その二律背反的な部分，いくら強調してもし過ぎることはないと思います。いまだに高校の歴史で，啓蒙時代はイコール奴隷時代だということを教える先生はなかなかいないそうです。この間，うちの学生で高校の先生になっているやつに聞いたんですど，そんなことはなかなか言えませんと。でも，やっぱり言わないといけないと思うんですよね。言ったほうがいいと思うんですよね。実際そうだったから。何が言いたいかというと，海賊は拿捕され，殺され，首を括られましたが，まだ海賊が海賊として機能していたときの地場というか，やり方というか，嗜好というか趣向というか，そういうものはまだまだ18世紀後半も19世紀前半も残っていたのではないかということです。レディカーとラインバウはそう言います。そのいくつもの事例が年表の1747年ぐらいからずっとあります。デスパード夫妻の叛乱から，50年ぐらいのスパンで港湾都市や奴隷貿易港でいろいろな反乱が起きます。ちょっと詳しい方はこれ見ておやっと思うかもしれないですね。特に1780年のゴードン暴動，これロンドンで起きたプロレタリアの暴動なんですけど，もともとこれは別に階級闘争ではないという説明が一般的なんです。ダグラス・ゴードンというスコットランドのプレスビテリアン（長老派）の貴族院議員が，カトリックを一時的に許容するという法律に対して反乱を起こしたんですね。暴動を起こしたんですね。そうやって世界史では教わるんですよ。だからイギリスの反カトリシズムの一つの兆候だというふうに教わるんですけど，いろいろ調べてみると，この暴動って別にそれにおさまるものではなく，テムズ沿岸のドックヤードや倉庫の労働者たち，それもそれぞれマルチチュード，いろいろな人種，元奴隷，解放奴隷，魚屋，漁師，それから鍵職人なんかの人々，いろいろな下層階級の労働者たちが参加して監獄を打ち壊すという，そういう話なんです。その暴動に海賊的なモチーフを読み込むことはできるとレディカーとラインバウは言います。だからこそ「ヒドラ」という多頭の竜の比喩が大事なんです。多頭の竜は一本の海賊という首を切られても，そこの下にある胴体はまだ海の中に残っているわけですから，違う形でまた海面に顔を出すよということです。このデスパード夫妻というのは，これは元イギリスの海軍提督夫妻で，1798年のアイルランド独立運動の一つの「ユナイテッド・アイリッシュメンの蜂起」に深くかかわっていて，一回監獄に入れられるんですけど，懲りずに自分たちで体制を股に掛けた一大陰謀を繰り広げようとするんです。つまり王政を廃止するという計画を立てる。王の首をとって共和制をつくろうという，そういう陰謀を張りめぐらすんですけど，デスパード提督は白人，コンウォール出身です。ただ，その妻は元奴隷，アフリカ人だったんです。というのが1802年に発覚して2人とも国家に殺されるわけなんですね。

6. おわりに：原型に帰る―ナポリのマサニエッロと共和主義の精神

ここでの話で終わってしまうと，レディカーとラインバウをただなぞることになってしまうので，あえて最後の一幕は歴史をばっとさかのぼります。そしてまとめます。17世紀，カリブで海賊が活躍していた時代はどうやって訪れたのか。それは一部のラディカルなやつらが移り住んだことと，陸にいられなくなった連中，コモナー（平民）として陸にいられなくなった連中が海に出ていったという説明は，ある程度正当性があるでしょう。ではまだ国民経済も国民

国家もきちんとした植民地システムも体系化されていない時代に，どういう精神性が海の上を暴れ回っていたのかということを，もう少しさかのぼって考えたいなと僕は勝手に思いました。たまたまこの間，学生のサマー・スクールの引率でナポリに行って来たということもあり，そこでこのマサニエッロという人に出会いました（図14）。ご存じですかね。トマソ・アニエーロとか，アマルフィのマサニエッロとも言われます。『多頭のヒドラ』にもマサニエッロは登場しています。マサニエッロというのはナポリ近郊のアマルフィ出身の漁師で，魚市場で仕切り役をやっていた，言ってみたらごろつきの親玉みたいな人間です。ところが，当時のナポリです。ハプスブルク家スペインの支配下にあるナポリです。漁村であり漁港であると同時に一大貿易地でもありました。当然奴隷もいました。北アフリカやサハラ以南のアフリカ大陸からいろいろな人が来ていました。これはナポリ市内のカポディモンテにある美術館の肖像画なんですけど，これはマサニエッロの妻だと言われています（図15）。「ムーア人」だという説明がありました。このマサニエッロがレモンに重税をかけようとしたハプスブルクの代官に対して一揆を起こします。反乱を起こします。このマサニエッロの反乱が1647年に起こる。この2年後パトニー討論が開かれるわけですけれども，このパトニー討論のときに，討論に参加していたラディカルズたちの口からマサニエッロという名前が出たそうです。

レジュメの第4節，4章です。このマサニエッロについて，僕はとある学会誌に去年短い論考を寄せているんですけど[9]，それからの引用が2カ所載っていますが，ここでマサニエッロが訴えようとしたことは，大義というか，イデオロギー的な言葉を彼は使わずに，パンがこんなに高いんだよ，卵がこんなに高いんだよ，レモンがこんなに高いんだよ，何でだと思う。それはハプスブルクのやつらが，代官が変な税をかけてくるからだよ。採ったレモンはどこに行くの。俺らの口には入らないよねとか，そういう常に具体的な言葉で民衆を鼓舞して，10日間の自治権を確立する。最後は皆殺しに遭うわけなんですけれども，そういうことがありました。それ

図14

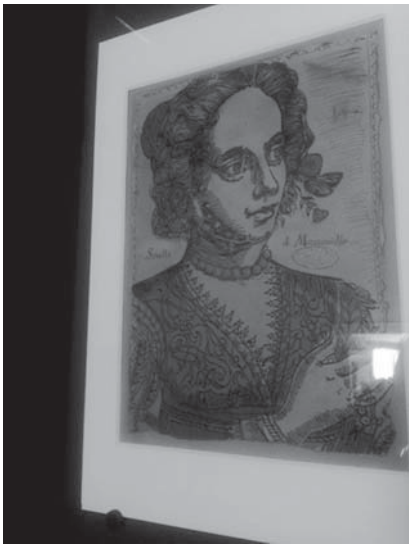

図15

を伝え聞いた北ヨーロッパの知識人たちは結構戦々恐々とする。このレジュメにも２つ目の引用にあるんですが，ジョン・ロック，ジェームズ・ティレル，それからトマス・ペイン，みんなあまりマサニエッロのことをよく言っていない。怖いんです。やばい。そのやばいという理由は三者三様ですよ。ですが，当時でき上がりつつあった世界システムの中枢に思考を注ぎ込んでいこうとしていたこのイギリスの知識人たちの目には，マサニエッロがやったことはかなりやばいと映った。そのやばさを海賊たちは継承していたのではないか。これも全然実証する余地のない妄想です。ただ，その妄想を裏づけてくれる人がいます。これもご存じの人もいると思います。スピノザですね。バールーフ・デ・スピノザはマサニエッロよりちょっと年下なんですけど，マサニエッロの反乱をアムステルダムで伝え聞いて，彼に憧れて漁師の格好をした自画像を描いたというふうにドゥルーズが書いています[10]。ジョン・バージャーもそう書いています[11]。そのときにスピノザはマルチチュードという言葉を記していると言われています。言われていますとか，本当かわかりませんとかという話ばっかりで，本当これからコメントいただく歴史家の方々には恐縮なんですけれども，こういう僕のような妄想家の世迷言をちゃんと合理化してくださるのが歴史学の先生方のお仕事だと思っていますので，このぐらいにして，後は皆さんと一緒にいろいろ考えたいと思います。

このマサニエッロが住んでいた家を見つけたんですよ，ナポリで。その名もピアッツァ・メルカート，マーケット広場。もう当然新しくなっていますよ，家そのものは。ナポリも第２次大戦中に連合軍の空襲を受けたんで新しくなっているんですけど，ここにレリーフがあります（図16）。マサニエッロというのはトマッソ・アニエーロのリエゾンした感じで，マサニエッロって言う説もあります。このマンションが面しているのがピアッツァ・メルカートなんですけど，ちょうど行ったとき，そこで男の子たちがサッカーをやっていました（図17）。サッカー文化研究が一応の本職なので，というオチで〆たいと思います。どうもありがとうございました。（拍手）

図16

図17

注

1）Peter Linebaugh & Marcus Rediker *The Many Headed Hydra: Sailors, Slaves, Commoners, and the Hidden History of the Revolutionary Atlantic*, Beacon Press, 2001

2）1970年代以降，ヨーロッパではアフリカ系の選手を猿，もしくは未開の下位人間に見立ててバナナを投げつけるという人種差別行為が横行した。

3）『イギリス海賊史　上下』朝比奈一郎訳，リブロポート，1983

4）樽に入れた黒ひげ海賊の人形に順番に剣を刺していって，人形が飛び出たらその人の負けというタカラトミー社発売のゲーム。

5）『奴隷船の歴史』上野直子訳，みすず書房，2016

6）Peter Linebaugh *The London Hanged: Crime and Civil Society in the Nineteenth Century*, Penguin 1991

7）『海賊ユートピア：背教者と難民の17世紀マグリブ海洋世界』菰田真介訳，以文社，2013

8）Burg, B. R. *Sodomy and the Pirate Tradition : English Sea Rovers in the Seventeenth-Century Caribbean*, New York University Press, 1995

9）小笠原博毅「掘りまくってヘッジを倒せ―資本と自由，ついに離別」『年報カルチュラル・スタディーズ』Vol.4, 2016

10）『スピノザ―実践の哲学』鈴木雅大訳，平凡社ライブラリー，2002

11）John Berger, *Bento's Sketchbook*, Verso, 2015

【略年表】

1635　グロチウス『自由海論』

1647　マサニエッロの叛乱（スペイン・ハプスブルグ支配下のナポリ），ディガーズ（真正水平派）の叛乱，パトニー討論

1649　清教徒革命

1651　航海条例

1688　名誉革命

1718　エドワード・「黒髭」・ティーチの処刑

1720　メアリ・リード＆アン・ボニーの捕縛

1722　大海賊バーソロミュー・ロバーツ，イギリス海軍との戦闘で死亡

1724　Captain Charles Johnson *General History of Pyrates*　出版

＜大規模奴隷叛乱の時代：第1次マルーン戦争（1730），Stジョン及びガイアナでの叛乱（1733），アンティグア（1735），グアドロープ（1736），ニューヨーク・Stパトリック・デー蜂起（1741）など＞

1747　ボストン・ノウルズ暴動

1767　ノーフォーク暴動

1768　ロンドン港湾ストライキ

1776　アメリカ独立宣言

1780　ゴードン暴動

1789　フランス革命，オラウダ・エキアーノ自伝出版

1791　トゥサン・ルヴェルチュールによるハイチ革命

1798　ユナイティッド・アイリッシュメンの蜂起（エドワード・デスパード）

1802　デスパード夫妻の叛乱

1807　奴隷貿易法

1816　バルベイドスにおける「バッサの反乱」

1833　奴隷制廃止法